

くらしと協同の本

社団法人全日本冠婚葬祭互助協会 編 『無縁社会から有縁社会へ』

【BookData】

発行 水曜社 2012 年 7 月 116 ページ

値段 800 円 + 税

ISBN : 978-4880652900



評者：元橋 利恵 (大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程)

2010 年 1 月、NHK スペシャル「無縁社会～"無縁死" 3 万 2 千人の衝撃～」というタイトルで特集番組が放送され、「無縁社会」という言葉と実態が大きな反響を呼んだ。誰にも知られず引き取り手もないまま亡くなっていく人の増加がクローズアップされ、背景としてかつて日本社会を紡いできた「地縁」「血縁」といった地域や家族・親類との絆あるいは会社との絆である「社縁」が失われ、希薄になってしまったという問題が差し迫ったものとして語られるようになっていく。日本社会はどうすれば「無縁社会」から「有縁社会」に転換していけるのか。

本書は、2012 年に社団法人全日本冠婚葬祭互助協会（以下、互助会）の主催で行われた座談会の記録をもとに補筆を加えた内容となっている。座談会はコミュニケーションや消費・生活・働く女性に関わる事業や行政に携わる佐々木かをり氏を司会として、牧師を本業としホームレス支援に携わる奥田知志氏、宗教哲学・民族学・思想史研究者の鎌田東二氏、宗教学者の島藺進氏、家族社会学者の山田昌弘氏、そして冠婚葬祭互助会の経営者の一条真也氏といった 6 名の各分野の専門家を迎えて進行されている。

本書の特長のひとつは、「無縁社会」という表象に対する各分野の専門家からの経験や洞察

に基づいた分析にある。もうひとつは、社会を「無縁社会」から「有縁社会」というものへ転換していこうという際の契機として、互助会をはじめとした様々な「縁」をつなごうとする人びとの草の根的な活動に焦点をあてている点である。その前提には、すべての人には「つながりあう」「支え合う」「助け合う」という「本能」があり、「社会」が「無縁」になるという「無縁社会」は実質的にはあり得ないとした「無縁社会」を前提とした議論への違和感がある。

本書でも語られる「無縁社会」といわれる現象が起きた背景には、社会や経済の問題と「人の心の問題」が、時間的ずれがありつつも関連する形で噴出し、徐々に人々の実感に結びついたということがある。日本における野宿者が急増したのはアジア通貨危機のあった 1997 年から 98 年にかけてであり、同年には自殺者が年間 3 万人を突破している。そのため「無縁社会」というものが広く実感されるようになったのは 98 年頃であるといわれる。そもそも、「無縁」や「孤立」がそれまでとは一線を画して社会的に認知されるきっかけとなったのは、95 年の阪神・淡路大震災とオウム真理教の事件といわれる。阪神・淡路大震災では若年で比較的恵まれた住居に入居した人よりも、年配の孤立

しがちな人が被った損害の大きさが象徴的であった。その後の仮設住宅でも「孤独死」など「無縁社会」の被害が集中的にみられた。1990年代後半に顕著になってきた「人の心の問題」の例として家族がある。90年代には「あえて」フリーターという働き方を選択し独身でいたという人が多かったとされるが、2000年代にはいり新自由主義の傾向がさらに進んで非正規雇用問題が深刻になると、「正社員になりたくてもなれない」というフリーターが増加した。そのなかで、「結婚をしない」という意識についても、00年代では結婚して人並みの生活に足るお金を稼げないから結婚できない、収入が安定している相手が見つからないから結婚できないという意識へと変化している。

本書では、「無縁社会」にかかわる日本社会の問題として、正規社員の人と非正規社員の人の、結婚している人と独身の人というように、異なる境遇にいる人同士のつながりが切れていることが指摘される。それは、人々が「縁」を確認する場の希求が絶えてしまったというわけではない。人々のニーズを中心にして「縁」をコーディネートするということが今求められているのである。

そこで本書では、かつては地縁集団や血縁集団でまかなってきた結婚式や葬式を、安価で手軽にあげられるシステムに置き換える機能を果たした互助会のほか、多様な「縁」にまつわる活動への言及がなされている。例えば、互助会について、一面ではかつての「縁」を希薄にする一因となったと評価しつつも、反面では人びとの「助け合い」「支え合い」の精神を基盤とした「縁」のインフラとしての役割が期待されると述べられている。また、一条氏の主催する「隣人祭り」は、地域の隣人たちが食べ物や飲み物を持ち寄って集い、食事をしながら語り合う会であり、ヨーロッパを中心に世界30か国以上、1000万人もの人々が参加するイベントである。一条氏はどんな人でも地球上に住んで

いる限り血縁がない方でも地縁はある、と「隣人祭り」の普遍性を説く。「地縁」と同じく誰しもにおとずれる「死」を考えてお互いに連帯するという取り組みもある。島藺氏からは、独身ないし単身者の女性を中心に共同で死の準備をする組織である「もやいの会」や、がんになった人やその関係者同士がウォーキングリレーを続け亡くなった仲間を追悼する会である「リレー・フォー・ライフ」が紹介される。

本書では以上のような現状を踏まえ、有縁社会の再生に向けた取り組みの可能性として主に3つの点に言及している。1つめは、上でも挙げたような様々な「縁」をつなぐ活動のサポートである。それは地域の民生委員やPTA、NPO・NGOなど様々なものが想定される。2つめは、自分の問題を開示しシェアするという「自分のことをわかちあう」という意識の促進である。自分のなかにある一見ネガティブなものを「縁」に変えていくというところに可能性がある。そして3つめは、困窮者ほど沈黙させられるという傾向に対する、「パーソナル・サポート」という仕事の重要性である。「パーソナル・サポート」とはまさに他人の「隣人」となるという活動である。奥田氏は、それは全く新しい専門をつくるということではなく、既存にある縁をコーディネートすることによって可能であると述べ、お寺や神社の地域住民との繋がりや役割に注目している。すなわち既存のケアの仕事をする多様なグループが協力体制をつくるのが重要となってくるのである。

縁とは、自分の問題を開示し他人の問題に応答するというケアの相互作用に他ならない。有縁社会への転換は失われたものを「取り戻す」ものではなく、今ある相互作用のルールから始められるものであり、始まっているものではないのだろうか。その意味で本書における既存の縁のコーディネートという視点は、「無縁社会」のみならずとも何らかの社会の転換を論じる上で重要な示唆を与えるものと思われる。